

伝統的言語文化と保育内容「言葉」Ⅱ —ストーリーテリングと幼児教育—

浅 木 尚 実

Naomi Asagi

要約:本論の前稿となる「伝統的言語文化と保育内容『言葉』Ⅰ—昔話と幼児の『聞く力』」では、小学校の学習指導要領「国語科」の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に着目し、小学校低学年での「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」が授業内容として挙げていることを軸に、幼児教育に積極的に昔話を導入することを提案した。オールリクやリュティ理論から、昔話の様式や特徴が、幼児の「聞く力」の発達を促すことを考察した。昔話が子どもの「聞く力」に適している文学であることを立証したが、次の段階として幼児期に昔話を聞く環境は整っているかどうかに対して疑問を持ち、質問紙によるインタビュー調査を行った。その結果、保育士のほとんどが昔話に興味関心を持ちながら、方法論を模索していることが判明した。そのため、本論では、昔話を通して「聞く力」の発達を促すストーリーテリングの指導法を提唱することを目的とした。

キーワード: 保育内容「言葉」・「聞く力」指導法・国語・伝統的言語文化・昔話・ストーリーテリング

はじめに

本論の前稿となる「伝統的言語文化と保育内容『言葉』Ⅰ—昔話と子どもの『聞く力』」では、小学校の学習指導要領「国語科」の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に着目し、小学校低学年での「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」が授業内容として挙げていることを軸に、幼児教育に積極的に昔話を導入することを提案した。オールリクやリュティ理論から昔話の様式が、昔話が幼児の「聞く力」の発達を促すことを考察したが、次の段階として、幼児期に昔話を聞く環境は整っているかどうかに対して疑問を持ち、質問紙によるインタビュー調査を行った。その結果、保育士のほとんどが昔話に興味関心を持ちながら、方法論を模索していることが判明した。

本論では、昔話を通して幼児の「聞く力」の発達を促すストーリーテリングの幼児教育への導入を目的とした。従って、幼児期に昔話を伝える重要性を説くとともに、昔話を幼児が聞くことが可能となる環境の第一段階として、ストーリーテリングの語りを取り入れることを提唱する。本論の構成は、Ⅰでは、質問紙調査の内容を紹介しつつ前半部分を考察した。Ⅱでは、質問紙調査の後半部分を分析し、考察した。Ⅲでは、ストーリーテリングとは何か、また幼児期におけるストーリーテリングの必要性を説いた。

Ⅰ. 「昔話と環境」に関する質問紙調査

1. 昔話と子どもの「聞く力」

「伝統的言語文化と保育内容『言葉』Ⅰ—昔話と子どもの『聞く力』」では、昔話が「聞く力」に適した文学であることを考察したが、結論の部分を引用すると次のようになる。

昔話は、はじまりの部分で、「昔々あるところに」と最小限に必要なことばを使って、一つの物語に必要なもの全てすなわち時間・場所・主な登場人物・テーマ（中心となる問題）と、出来事の発端が紹介される。こうしたはじまり方は、聞き手に全体の見取り図を示すことになり、導入部分から聞き手を引き込む仕掛けが整っていることになる。その後、一本のレールの上を外れることなく、話が展開していくため、聞き手はそのレールの上に乗って最後まで話を楽しむことができる。登場人物は、主人公を中心に話の展開に必要な役割をこなしていく。時に出来事が三回の繰り返しによって強調されながら、クライマックスへと運んでいく。主人公は善を象徴し、悪と対峙することによって聞き手の共感を得、最後には悪が減ぼされることによって、聞き手の満足を得ていく。

まだ、経験の浅い幼児期には、登場人物はなるべく単純化され、対照的に描かれることによって理解しやすくなる。話の展開も横道にそれず、後戻りしないことが聞き

やすい条件となるであろう。

本論では、主に言葉の発達の中で、初めて出会う文学としての昔話が幼児に適していることを主張してきた。特に幼児の聞く力を鍛える意味でも、昔話が適していると確信できた。しかし、幼児期に昔話を聞く環境は整っているのだろうか。次の段階として、幼児教育において、昔話を聞く環境を整えていくことが課題であろう。

このように、幼児期には育つ環境が重要であることは言うまでもないが、昔話を聞く環境が昔話に関する環境を保育士がどのように考えているのかを疑問に思った。そこで、保育所における昔話環境を調査するために、質問紙によるインタビュー調査を行った。

2. 保育所における質問紙調査ⁱ

(1) 方法

関東圏の保育園 10 園の保育者 111 名を対象に、質問紙を用いた調査(無記名式)を実施した。実施時期は、平成 29 年 6 月初旬～7 月初旬に行った。現代の昔話の環境をどう思うかを自由記述で調査した。

(2) 対象者の内訳

質問紙調査での 10 園 111 名の内訳は次のような年齢構成と男女比及び勤続年数であった。

年齢： 20 歳代 - 30% 30 歳代 - 32% 40 歳代 - 15% 50 歳代 - 19%
60 歳代 - 4%

男女比：女性 95% 男性 5%

勤続年数：3 年以内 - 23% 10 年以内 - 46% 20 年以内 - 25% 20 年以上 - 6%

(3) 質問紙調査内容

ほとんどの回答者の自由記述に関する記載があった。量が多いため、項目に分け、代表的な意見を抜粋する。項目として次の 4 つ (i 「昔話の環境がある」、ii 「昔話の環境がない」、iii 「昔話についてどう考えるか」、iv. 「今後の指導について」) に分けた。

(4) 質問紙調査の結果及び分析 1

i) 「昔話の環境がある」と回答した代表的な意見

はじめに、昔話を幼児に伝えている方法として、昔話の環境があると回答した代表的な意見として、さまざまな媒体を通して行っていることがわかった。

ⁱ 秋草学園短期大学専攻科学生岩瀬愛による調査 本人からの許諾済み

表①：i. 「昔話の環境がある」と回答した代表的な意見

<p>昔話は本来、語りで伝わってほしいし伝えたいもの。園では<u>ストーリーテリング</u>を30年近く続けて内外の昔話(グリムなど)を語っている。語り部に来てもらうのは月に1回でその間職員が少しずつ持ち話を増やし語りに挑戦している。</p>
<p>昨年、年長だった女の子は母(30代)から昔話の楽しさを素話のように教えてもらいその内容を覚えてから<u>ユーチューブ</u>で見ていると言っていた。</p>
<p>昔話は「<u>本から知る</u>」という印象が強い。わらべうたと同じように人から人へと伝える手法や環境を途絶えさせないようにしたい。</p>
<p>家では<u>テレビ</u>で昔話を見る機会があると思う。保育園ではテレビのない環境となるため<u>絵本</u>や<u>紙芝居</u>の他に素話で子どもたちが自由に頭で想像しながら伝えることも大切にしていけたらと思う。</p>
<p>言葉が<u>方言</u>だったり、動物やお年寄りを大切にする。正直者でいることなど昔話の中で自然に学んでいったため、もっと日常生活の中でどんな形でも取り入れていけたらよいと思う。</p>
<p>現代では、<u>アニメ(テレビ)</u>等で伝わっていることが多く、映像で決まったものとなっているが、昔のようにほとんどが素話で伝わっていた。自分の幼い頃は自分で次を想像したり、楽しくも考えたりという環境が必要と思われる。</p>
<p>便利な世の中になり、子どもたちが知りたいと思えば大抵のことは<u>インターネット</u>で知ることができるが昔話などはやはり素話や読み聞かせなど人の声を介して伝えられるべきだと思う。人の声の温かみや雰囲気、そうしたものが含まれてこそその「昔話」だろうと思っている。</p>
<p><u>テレビ</u>や<u>動画</u>もわかりやすく楽しめますが、はじめから声や音楽などを与えられてしまうことで、想像の機会をへらしてしまっていることにもなるのではないかと思います。</p>
<p>映像と音声で昔話を知ることが多いと思うが、<u>素話</u>のように耳からだけの情報で想像して楽しむのも面白いと思う。今の環境がというよりは、色々な方法が良いのかもと思う。素話で想像するという事は、他者の気持ちを想像したり思いやりする力にも結びついていくのではとも考えるので、是非昔話の機会は増やしてあげたいと思っています。</p>
<p>映像のイメージは強く残ると思う。<u>絵本</u>や<u>素話</u>で語り継がれてほしいと思う。</p>
<p>自分が子どもの頃も既にテレビが家庭にあるのが当たり前でしたが、私は、家庭に<u>童話</u>や<u>昔話の絵本シリーズ</u>があったので、読んでもらったり自分で読んだりしていた。テレビの昔話はほとんど見た記憶がないので、やはり<u>絵本</u>が身近にあったことが昔話に接する機会だったと思う。</p>

<p>テレビの放送で「日本むかし話」のアニメが再放送されており、昔話に興味を持つきっかけとして良いことだと思う。しかし、絵本や素話で昔話にふれることはアニメと違った楽しさやその面白さを感じた子どもが大人になったときに、自分の子どもに同じように伝えていく…という効果が高いと思うので共存が良いかと考えている。</p>
<p>今、放送されているか分からないが「まんが日本昔ばなし」という TV 番組はのんびりした語り口調で良かった。また、絵本は繰り返し読むことができるので家にあると良い。親の言葉（声や息遣い、間）によって伝えられる環境があると子どもの情緒も育つと思う。</p>
<p>映像で見る昔話も良いと思うが絵本や紙芝居で見る環境も大切にしたい</p>
<p>昔話や童謡等、伝え続ける大切さを実感している。</p>
<p>子どもたちは、絵本、紙芝居が大好きで夢中になってみて豊かな反応をする。現代の環境の中では、保育者や保護者が機会を作り（積極的に読んであげる 等）日本の昔話を伝承していこうと心掛けなければ目にしたり耳にすることはなくなると思う。それは残念だ。</p>
<p>テレビで昔話を流すなら良いと思う。仕事をしていて読み聞かせをできない保護者もいると思う。</p>

〈考察〉

自由回答によると、全体的に絵本が多いが、保育士自身がテレビの「日本むかし話」のアニメを見た経験がある保育士も少なくない。他には、紙芝居、ストーリーテリング、素話や現代的なところでは、YOU TUBU、インターネット等の回答もあった。

図1は、質問紙調査（選択肢）「1-①現在、保育の中で伝えている方法」では、図1が示すように、絵本30%、紙芝居26%、素話11%他であった。

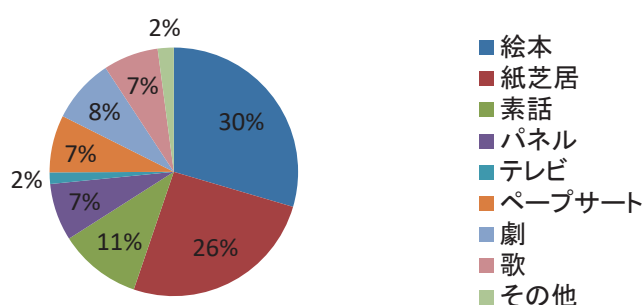


図1：現在、保育の中で伝えている方法

ii) 「昔話の環境がない」と回答した代表的な意見

中には、昔話を伝えていない環境に気付いた保育士の意見も少なからずあった。表②に示すのは、この質問紙調査によって昔話環境を考える機会に気付かされたという代表的な意見である。

表②：「昔話の環境がない」と回答した代表的な意見

昔話の絵本はあるが、保育の中で使用しているのを見たことがなく、このアンケートで保育園でこんなに伝えていないと気付かされた。
自分が大人になり意識が薄れているだけかもしれないが、以前に比べ昔話を知る機会が減っている気がする。
だんだんと触れ合う機会が減っていると思う。もう少し子ども向け番組等で放送等行っても良いのではと考える。
子どもは読んでもらった本が好きになるという話を聞いたことがある。わらべ歌遊びなどしていると「もう一回もう一回」と楽しんでいる。遊びの中（保育室か散歩）で提供して楽しんでいるが、周りの保育者がお話を積極的にしているのはあまり見たことがない。今の保育の在り方では昔の話は表現がきつかったりするので使われないのかもしれない。
養育者の年齢が若くなると、養育者自身も昔話に触れたことがない人が多いため、触れる機会がないと次世代には伝承されないとされる
今の子どもたちの保護者の世代があまり昔話に接してきていない方が多いようで、テレビをうまく利用して親子で楽しめる環境になると良いと思う。

〈考察〉

「昔話の環境がない」の意見の中には、保育士自身に昔話体験のない人が増加していることも伝承されない要因の一つと指摘しているものもあった。また、今の保育の現状の中で表現の問題が取り入れにくいのではないかとこの考えもあった。

Ⅱ．質問紙調査の結果及び分析 2

Iの調査内容と考察は、昔話を実際に子どもにしているか否かという手段と環境の質問に関する考察が主であったが、Ⅱでは、それぞれの保育士が昔話に対してどのように考えているか、また今後についての意見の内容と考察に言及したい。

1．昔話についての保育士の意見

1) iii 「昔話についてどう考えるか」

質問紙調査では、さまざまな意見が記載されていたが、昔話と子どもについての全般についての考えが表れているものも多かった。

表③：iii. 「昔話についてどう考えるか」

<p>CMなどで流れる昔話の主人公は昔話の内容を知らないままに見ている子どもが多いのではないと思う。昔話を当たり前のように知っている世代とは違った感覚のものになっているように思う。昔話には教訓めいたものが多いが現代とのズレがあることも多く、子どもにどう伝わっていくのかと思う。</p>
<p>テレビが普及し、テレビがついている時間が増えたとどうしても絵本を見る時間が少なくなってしまう、昔話となると接する機会が減ってきていると思う。自分が小さい頃はよく絵本などで昔話を見ていましたが、最近保育で絵本を読む時も昔話を取り入れることが少なくなっている。これを機にもう少し昔話を取り入れていきたいと思う。また、テレビでも忠実な内容であれば子どもが昔話に親しむきっかけになるので良いと思う。</p>
<p>色々な絵本、紙芝居があるがやはり昔話は人気がある。また最近の本は事前に一度読まないで内容やメッセージが子ども向けでないこともあるが、昔話は安心して読める。やはり昔から語り継がれるものはメッセージもしっかりしていて、決してなくなることはないと思う。</p>
<p>自分が幼い頃、絵本、紙芝居だけでなくテレビを通して（日本昔ばなし）知った話もあり、楽しかったり怖かったりしていたので、どんな手段であれ、物語に触れることは悪くないと思う。自分が保育士としてできる本の読み聞かせは大切にしていきたいと思う。</p>
<p>本来の昔話とはかけ離れているものが多いと思うが昔話に親しむきっかけの一つになるかもしれないと思う。</p>
<p>子どもの頃、昔話を知る方法はTVの「日本昔話」と父・祖父が読んでくれた絵本や素話だった。特に『泣いた赤鬼』に感情移入したことを覚えている。介したメディアがTVであろうと絵本、素話であろうと、心に刻まれるものに差はないと自身の体験を振り返って感じる。それは昔話に宿る“物語の力”がそうさせていると思う。自身の子どもの頃と比べると、現代はPC、タブレット等メディアは多様化しているがいずれもメディアを介しても“物語の力”がそれによって薄れることはないと思う。</p>
<p>自身が小さい頃はテレビや絵本を通して昔話を身近にふれることができていたので、今はあまり触れる機会がなく残念に思う気持ちがある。絵本や紙芝居などを通して子どもたちに昔話を伝えていきたい。</p>
<p>もっと昔話を見る機会があればいいと思うが、テレビアニメで放送していないので絵本等で読み聞かせしてあげて、大人になっても覚えていたらいいなと思う。</p>
<p>保育の現場では、絵本や紙芝居を通して子どもたちに昔話を伝えていきたい。しかし、昔話のなかには現代では理解できない、またはいけないこととされているものもあるので選択していきたい。</p>

<p>保育園や幼稚園で初めて昔話に出会う子どもたちが多くいると思うので、読み聞かせや劇等で伝えていく環境を作っていきたいと思う。</p>
<p>今も昔もあまり変わらないように思う。接する機会は減っていないと思うが、昔からずっとあるものなので無くならないでほしいと思う。</p>
<p>昔話には「繰り返し」の大切さや必ず正しく生きている人が良い結末になる…というような法則のようなものがあると思うがそれをあまりに無視したり、子ども受けするように脚色したり、キャラクターっぽく描かれていたり（怖がらせないように）することに疑問を持つ。テレビ等は今、避けられないが言葉(声)で伝えていく平行して大切にしてほしい。</p>
<p>親や祖父母より話を聞いたり、絵本を読んでもらったりするよりも視覚からなんでも情報を得ている今の子どもたちにとっては普通のことで1番接しやすいと思う。</p>
<p>子どもが昔話に親しむ、また知る手だてとして身近なものがあるのは良いと思う。媒体は多くある方が親しむ機会が増える。また色々なパターンでの同じ物語を見られるのではないかと思う。しかし、テレビのみに頼らず、人から人へ直接の伝承も大切にしていく必要はあると思う。</p>
<p>以前、放映していた「日本むかしばなし」のような番組がなくなり、昔話に接する機会は減ったと思う。同様に子どもたちも接する機会が少なくなってきたということで考えると残念に思う。内容的に現代の生活とはかけ離れているところがあると思うが、想像力を養い、昔を知るためにもテレビ、保育所等での昔話の取り組みは必要かと思う。</p>
<p>今も昔もあまり変わらないように思う。接する機会は減っていないと思うが、昔からずっとあるものなので無くならないでほしいと思う。</p>
<p>昔話に触れ合いやすくなったと思う。自身は、昔話の価値は話の内容や教訓よりも親しい大人との安心できる時間を作ることができるものだと思う。そういう意味では、昔話の大切さは小さくなってしまっていると感じる。</p>

〈考察〉

どの意見も昔話に接する機会が減っていること言及している。ほとんどの意見に昔話に関心があり、昔から伝えられている価値を尊重し、伝えていきたいという意欲が感じられる。また、物語の力に言及している保育士もあった。

2) iv 「今後の指導法について」

記述の中には、今後積極的に昔話を取り入れていく方針を示しているものも多かった。

表④：iv. 「今後の指導について」

<p>子どもの顔、反応をみながら繰り返し読んであげたい。(テレビでは一方通行なので) 保育者自身が昔話を知らなかったり、あまり興味がないことが増えたように思う。素話ができる職員も減っていて残念。子どもたちはいつの時代も、話を聞けばとても興味を持っていると思う (感じる)</p>
<p>昔話などの伝承の内容を子どもたちに伝えるには、テレビなどのツールを利用することも必ずしも悪いことではないと思う。ただ、テレビを通してだと、言葉を獲得するときに、必要な反応がなかったり人と人との言葉のやりとりが希薄になってしまうと思った。</p>
<p>素話で想像を膨らませて楽しむことや大好きな大人がその間絵本。自分に気持ちを向けてくれるという暖かみは、テレビやスマートフォンの動画では得られない。同じ昔話でも伝え方によって子どもへの影響が異なることを意識しておくことが必要と感じる。(意識したうえでテレビ、スマートフォンを与える (時間を決めて))</p>
<p>子どもの顔、反応をみながら繰り返し読んであげたい。(テレビでは一方通行なので)</p>
<p>子どもが昔話に親しむ、また知る手だてとして身近なものがあるのは良いと思う。媒体は多くある方が親しむ機会が増える。色々なパターンでの同じ物語を見られるのではないかと思う。しかし、テレビのみに頼らず、人から人へ直接の伝承も大切にしていける必要があると思う。色々な娯楽が増えている中で、あえて絵本などで昔話を選んで買ったり、読んだりする人が減っているのではないかと思う。しっかり口で伝えていくことが大切だと思うため、保育園では積極的に選んでいきたいと思う。</p>
<p>自身は保育園出身だが、保育園よりも家に帰って母親が毎日絵本の時間を作ってくれて昔話をよく見ていた。デジタルよりアナログで子どもたちに伝えてあげたいと思う。</p>
<p>色々な娯楽が増えている中で、あえて絵本などで昔話を選んで買ったり、読んだりする人が減っているのではないかと思う。しっかり口で伝えていくことが大切だと思うため、保育園では積極的に選んでいきたいと思う。</p>
<p>昔話をきちんと聞く環境がどんどん少なくなっていると思うため読み聞かせなどでどんどん話を聞かせてあげたいと思う。良いものがたくさんあると思う。</p>
<p>昔話がなくなりつつある現代だが、昔話を語り継いでいくようにいたいと思う。</p>
<p>テレビでも昔話というのはあまり見られなくなり、絵本や紙芝居や又はオペレッタなどで聞ける機会があると良い。</p>
<p>接する機会が少なく、残念に思う。良い話もたくさんあり、伝えていきたいと思う。</p>

年齢よって昔話を伝える方法を考えていけば、子どもたちも興味を持つようになると思う。現代が進化しすぎてしまい昔話を読んでも、登場人物や内容など伝わりにくくなってしまい保育でもあまり利用しなくなったことも大きいと思う。読み聞かせだけでなく様々な媒体(テレビ、スマホ、絵本など)で興味を持つことができるのは良いと思う。
テレビアニメで見られることは良いと思う。Eテレでも放送しても良いと思う。
意識して取り入れていかないと、触れることがなくなっているのかと思う。
自身が小さい頃より触れる機会が減っているように感じる。
テレビでも昔話というのはあまり見られなくなり、絵本や紙芝居や又はオペレッタなどで聞ける機会があると良い。
様々な解釈が情報として流れているので、本来の昔話ではない物語を本物として認識したりすることをよく見かけるようになった。もっと本物に触れる機会が多く取り入れられたれ良いと思う。

〈考察〉

昔話を子どもに身近な物語として今後取り入れていこうという意欲が示されているが、その方法として、絵本、紙芝居、オペレッタ等の他に素話(ストーリーテリング)をできる保育士が減っていることを残念に思う意見が多くあった。

Ⅲ. 幼児教育とストーリーテリング

前述の自由記述の中でも、昔話を「聞く文学」として、素話(ストーリーテリング)をもっと保育士が取り入れていくことを推進していきたいという意見も数多くあった。そこで、ここでは、ストーリーテリングとは何か、また、幼児の発達にとっての効用を述べていきたい。

1. ストーリーテリングとは

ストーリーテリング(storytelling)あるいは「素話」とは、語り手がテキストを見ずに子どもに語る無形の児童文化財である。アメリカの図書館学を学び、かつ図書館で勤務した後、公益財団法人東京子ども図書館を設立し、ストーリーテリングの普及に努めてきた松岡享子は、お話を「語り手が、主に声によって表現し、それを聞き手ともどもたのしむ文学」と定義している。

紀元前より、地球上のどんな小さな国の民族でも、独自のお話を持ち、それを語り継いできた。その多くは、口承文学である昔話である。15世紀頃より印刷技術の発達し、文字として本として記録されるようになった。昔話の多くは、各地に存在した語り部が、自

分が幼い頃に聞き覚えた話を子孫に語り伝えてきた。

ルース・ソーヤーは、「意識的に行われるようになったストーリーテリングのごく初めのは、部族の人々が毎日やっていた労働のリズムに合わせてうたった素朴な歌」であったと述べている。語り部は、「カリスマ性があり、ことばを巧みに操り、記憶力がよく、間の取り方にも巧み」(ソーヤー、1973)であったと指摘している。

21世紀に入り、各地でお話を語り継いできた語り部の数も減少してきたが、ストーリーテリングは、同じ地域、民族の共通の文化として、民族内や家庭内での自然の営みとして子育てにも使われてきた。しかし、現代のストーリーテリングのほとんどは、1960年代にアメリカやイギリスで始められた図書館の児童サービスの一環であり、本と子どもを結びつける一つ的手段として普及したものである。

本論の質問紙調査の結果から、日本では保育所、幼稚園ではほとんど定例的にストーリーテリングを行っている環境にある園は極少数であることが判明した。そこで、幼児教育において、いかにストーリーテリングが重要であるかを述べていくこととする。

2. 幼児教育とストーリーテリング

筆者は、大学で図書館学を学び、就職した児童図書館でストーリーテリングを子どもに語り、その後、養成校においても学生にストーリーテリングについての教鞭を20年以上執ってきた。その中で、『絵本から学ぶ子どもの文化』(pp.82-83 浅木、2016)において、ストーリーテリングを学ぶ学生向けのテキストとして、ストーリーテリングの効用を次の9項目にまとめた。

- ① 信頼感を深める
- ② 共有する財産となる
- ③ 意欲、集中力が育つ
- ④ 理解力、思考力が育つ
- ⑤ 想像の世界の間接体験ができる
- ⑥ 心が充実し解放される
- ⑦ 言語感覚が養われる
- ⑧ クラスで共通体験ができる
- ⑨ 読書へと発展する

「③意欲、集中力が育つ」「④理解力、思考力が育つ」「⑤想像の世界の間接体験ができる」「⑥心が充実し解放される」は、幼児が発達する上での認知能力や言語能力に関する重要な要素である。加えて、「①信頼感を深める」は、筆者の体験上、特筆すべきことであるが、ストーリーテリングができる保育士、教員は、子どもとの信頼関係を強固にすることが可能になる。というのは、絵本と違い、ストーリーテリングは、子どもと語り手の間に何も媒介物がないため、目と目の交流を基に、相互の意思疎通が容易になる。子どもの

聞き方を調整できるだけでなく、子どもの心の動きや感性をも語り手は感じることができる。子どもは、絵がないお話の世界を耳だけで聴いて、想像することになるため、普段の何倍もの集中力と思考力を動員してお話に聴き入る。まるで舞台の観客と役者のような一体観にとられる感覚になることがある。こうした成功例が、毎回起こるわけではないが、語り手と子どもとの間には、相互に糸で結ばれているように親密な感情が生まれ、お話を聴き終わった後も、もう一度聴きたい欲求に駆られることも少なくない。

現代、耳だけで聴く文学は、ラジオ以外ではほとんど体験することはできない。さまざまな玩具や視覚文化に囲まれて育つ現代の子どもにとって、ストーリーテリングは時代遅れであるどころか、新鮮で心躍る貴重な経験であることは間違いない。保育、幼児教育現場でストーリーテリングの語り手としての人的環境を整備していくことが急務であると考えている。そのためには、保育士や幼稚園教諭の養成課程においても、今後積極的にストーリーテリングを取り入れることが肝要である。

ストーリーテリングが無形の児童文化財であるので、実際にストーリーテリングの語りを保育所、幼稚園、児童館で行っている保育士や教員にインタビューを行い、筆者の体験した事例を立証していることや語り手の養成の仕方についてもまとめていくことが、今後の課題であろう。

【謝辞】

本論を書くにあたって、質問紙調査にご協力いただいた保育士の先生方またウッディキッズ代表の溝口義朗先生に深く感謝申し上げます。また、自身の卒業論文の為に取材した質問紙調査の一部を提供してくれた秋草学園短期大学専攻科学生岩瀬愛さんにも謝辞を表したい。

【参考文献】

- 野村滋、『グリムの昔話と文学』、ちくま学芸文庫、1997
松岡享子、『おはなしをこどもに』、日本エディタースクール出版部、1994
松岡享子、『おはなしを語る』日本エディタースクール出版部、1994
ルース・ソーヤ著、池田綾子・上条由美子・間崎ルリ子・松野正子訳、『ストーリーテラーへの道－よいおはなしの語り手となるために』、日本図書館協会、1973
アイリーン・コルウェル著、石井桃子訳『子どもと本の世界に生きて－児童図書館員のあゆんだ道』、日本図書館協会、1974
エリン・グリーン、芦田悦子・太田典子・間崎ルリ子訳、『ストーリーテリング－その心と技』、こぐま社、2009